法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2025-07-06

刊行あとがき

NAKANO, Hideo / 中野, 栄夫

(出版者 / Publisher)
法政大学国際日本学研究所
(雑誌名 / Journal or Publication Title)
国際日本学 / INTERNATIONAL JAPANESE STUDIES
(巻 / Volume)
1
(発行年 / Year)
2003-10-31

刊行あとがき

中野　栄夫

本書は、私たちが構築しようとしている「国際日本学」研究の最初の成果報告書である。巻頭の「『国際日本学』刊行にあたって」に記したように、私たちは、「日本学とは何か」ということを考えながらプログラムを推進しているが、本論集に収録されている成果すべてにその意図が貫徹しているわけではない。それは、現時点では、まだ共同研究の進展が緒についたばかりの段階であるという事情によるものであるが、全体の意思統一はともかく、本書に収録された各論文は、各メンバーがこの間に立ち向かったテーマに真正面から取り組んだものである。全体のテーマは特に立てることはせずに、各メンバーが現在取り組んでいるテーマを取り上げていただいた。各論考を逐次コメントすることは避けるが、若干構成についてふれさせていただく。

本書に収録した論考は大別して五つのジャンルに分類できよう。

まず第一は、「国際日本学」の方法論に関するものである。それが、中野栄夫「『国際日本学』方法論構築をめざして」であり、この論考は、このプロジェクトを推進する上で、中野が最低限必要と感じ、またプロジェクトを推進しながら得た、「国際日本学」の方法論を中間報告としてまとめたものである。

第二に、「日本学」をめぐる研究動向に関するものである。これにあたるのは、王敏「現代中国における日本研究概説（その一）－社会文化を中心に－」、西野春雄「世界の中の能－外国人の能楽発見－」、および山田志乃布「近世・近代日本におけるアイヌ史研究の課題」である。前二者は、外国における日本研究に論究したものであり、まさに「日本文化の国際性」について関説したものである。最後者は、日本国内でのアイヌ研究の動向についてまとめたものである。「日本」（ヤマト）と周辺史に関わるものであり、つぎの第三のジャンルとも重なる論考である。

そして第三に、「日本」と周辺地域（王権）との交渉史に関するものである。これに当たるのが、孫薇「中世・東アジアにおける隣国の行き来－明皇帝から琉球国王への下賜を通じて－」、吉成直樹・福寛美「琉球王国の成立と朝鮮半島－『おもろさうし』の政治的編纂意図から－」、溝川晃司「日麗関係の変質過程－関係悪化の経緯とその要因－」、そして和氣俊行「松前氏祖武田信広の出自について－従来の説の再検討と新しい可能性の提示－」、である。そのうち前三者は琉球と大陸との関係を論じたものであり、最前者

は明との交渉史、第二者は尚王権と朝鮮半島との関係を論じたもの。第三者は、「日本」（ヤマト）と大陸の高麗との関係史をあつかったものである。内容は個別研究の形をとっているが、本プロジェクトがこだわっている「日本文化の国際性」あるいは「日本の中の異文化」の視点がよく表れている論考といえる。

そして第四に、「日本」に関する個別研究である。それに当たるのが、金山喜昭・天野紀代子・山中玲子・澤登寛聡・横山泰子「富士山をめぐる日本人の心性」、および漆原和子・羽田麻美「屋敷囲いとしての石垣を作る文化－喜界島、阿伝集落の例－」である。前者は富士山をめぐる「日本人」（ヤマトの人）の心性をあつかったものであり、「古典文化と民衆文化」チームメンバーによる、分担共同研究である。後者は「風土が作る文化」メンバーの個別研究である。本プロジェクトでは、外国人の目を借りての共同研究を重視しているが、同時に、われわれも外国の人に正しい情報を提供し、正確な説明をなし得るように、「日本」に関する研究を深めて行かねばならない、と考えている。そういった意味でも、こういった研究は不可欠であろう。

そして第五に、本プロジェクトが展開する教育プログラムとして位置づけられる国際日本学インスティテュートの報告である勝又浩「国際日本学インスティテュート報告」である。国際日本学インスティテュートは、2003年４月に修士課程が開設されたばかりのものであるが、2004年４月よりは博士後期課程（博士課程）も開講することになっており、今後が期待される教育プログラムである。

さて、本プロジェクトの基本姿勢は、「異文化研究としての国際日本学」の構築と、「日本文化の国際性」の解明とにあり、また「日本の中の異文化」という視点も重要視している。本書の内容は、これで充分というものではないにしても、「日本」（ヤマト）ないし、琉球（沖縄）の問題のみに偏ることなく、北方史、大陸との交渉史などの研究成果をも擁し、今後の研究の展開が期待される内容となった。諸賢のご教示を期待するものである。

なお、最後に、お断りしておきたいのが、本書の組み版の体裁についてである。当初は横組み一本で通すつもりでいたが、縦組みの方がふさわしいと思われる論考もあったため、両者を適宜併用した。体裁は普通とられているように、横組みは右開き、縦組みは左開きとした。今後もこの体裁を踏襲する予定である。その点、ご理解をお願いする次第である。